SEMINAR HOUSE NEWS

セミナー・ハウス No.163

2001.10~2002.3

■巻頭言　科学論の社会的役割　／2・3
■平成13年度教育プログラム白書　／4
■平成13年度業務白書　／5
■教育プログラム報告　／6・7
第28回国際学生セミナー
第1回高校生のための「大学」セミナー
第186回／第187回大学共同セミナー
第23回大学教員研修プログラム
第3回／第4回フィールドワーク体験セミナー
■フィールドワーク体験記　／8・9
■法人ニュース　／10
■寄贈図書　／10
■ご利用状況　／11
■創立40周年記念募金　／12
■館長室から　／12

Plain living and high thinking

財団法人　大学セミナー・ハウス
INTER-UNIVERSITY SEMINAR HOUSE, INC.
www.seminarhouse.or.jp

第187回大学共同セミナー基調報告より

科学論の社会的役割

国際基督教大学教授　村上陽一郎

基調報告というのは実は大体問題の出発点からの歴史的な経過を話したり、それからその中で問題点を整理したりということをしなければならない義務があるそうですが、私はそういう方法をとりませんでした。科学vs科学論という今回のテーマですが、その問題の歴史を総括するのではなく、科学の専門家と科学の専門家でない非専門家という形で捉えるという視点から、この問題を解析したいと思っています。

科学に関する三つの時期区分

普通、私達が常識のなかで考えている科学を、一応私はプロトタイプと名づけました。プロトタイプというのは、大体19世紀ヨーロッパから始まったと考えます。私は科学史の専門家として、科学を三つの時期に分けています。プレサイエンティフィックな時代、それからプロトタイプの時代、ネオタイプの科学の時代の三つです。

プレサイエンティフィックな時代

プレというのは本格的な科学になっていない時代のことです。例えばニュートン、ガリレオという人達を、私は科学者だと認めません。これは挑発的に聞えるかもしれませんが、彼らを科学者だと認めることは完全な時代錯誤だと考えています。理由は非常にはっきりしていて、サイエンティスト、科学者という概念や言葉が生まれたのが19世紀以降のヨーロッパであって、それまでのガリレオにしてもニュートンにしても、フィロソファー或いはナチュラル・フィロソファーと呼ばれたけれども、科学者という呼ばれ方はしたことがなかった、という事実を指摘するだけで充分でしょう。あるいは、彼らの時代には、ヨーロッパ語の現在「科学」を表すために使われている言葉は、全て現在の「科学」という意味は全く持っていなかった。単に知識という意味でした。したがってその時代を「プレ・サイエンティフィック」と呼びたいのです。

プロトタイプの時代

19世紀になって私達が現在科学と呼んでいるような知的な営みというのが初めてヨーロッパに本格的に誕生しました。それに伴って、そういうことに携わる人間を指す名前として、英語のサイエンティストという言葉もできました。英語のサイエンスという言葉も、自然科学を表す意味の使い方というのが次第に増えてくる。自然科学を専門的に研究したり、教育したりすることができるような理学部も1870年代からヨーロッパの大学に生まれてくる。こうした事実から私は、科学の成立を19世紀に見たいのです。

プロトタイプの科学の特徴とは何か

では、そこで生まれた自然科学の特徴は何か。ここでは内容的なものではなく、社会制度的な側面に着目したいと思います。最も顕著な特徴は、科学者がそれぞれの領域に基づいて「科学者共同体」を作り上げたことです。サイエンティフィック・コミュニティーという英語の翻訳でありますが、もっと具体的に言えばそれは学会と言ってもいいわけです。

特定の領域の専門家の集団である科学者共同体ができますと、そこでの知的活動は、原則として自己充足的な、つまり共同体内部で完結するものとなります。知識が生産されていく過程は、科学者の共同体の内部に限られます。生産された知識は蓄積されますが、共同体が経営する学術ジャーナルがその媒体です。ジャーナルのなかに蓄積された知識は、共同体内部の仲間の間にだけ流通し、利用されます。評価もまた、仲間内で行われます。「ピア・レヴュー」という言葉がそれを物語っています。

こうして、プロトタイプの科学の特徴として、知識の生産、蓄積、流通、利用、評価、褒章、研究資金、研究倫理といったようなものがすべて専門家の共同体の内部で自己充足的かつ自己完結的に行われている、と考えることができます。このプロトタイプの研究というのは決して今なくなっているわけではなくて、むしろ今でも多くの方々が、科学をそういうものだと考えておられるはずです。つまりこういう科学研究というのが生まれてきたのが19世紀以降で、それが今日まで少しずつ整備されてきたということになりましょう。

しかし、20世紀後半になると、これとは違った新しい科学の姿が目立ち始めます。これを「ネオタイプの科学」と呼びたいと思います。

ネオタイプの科学

ネオタイプの科学では、まず研究の目的が、研究者自身の内的な動機によってではなく、社会的利得を生み出すために、共同体の外部のセクターが指定する、という特徴を指摘できます。いわば社会的ミッションとして研究が行われるようになるのです。知識の蓄積は、依然として学術ジャーナルが主ですが、しかし、非常に多くの場合、共同体とは異なる社会的制度、特に特許制度が重要になります。例えば今「ヒトゲノム読解計画」でもそうですし、いろんな形で生物特許というのが問題になっていますが、そういうものも含めて、かつて工学部以外ではありえなかった特許制度が、通常の意味での科学研究者にも非常に身近なものになってきています。あるいはTLO、つまり大学の理学系の研究のシーズが、なかなか社会的利得に繋がらないので、それを繋げるためのテクノロジー・ライセンシング・オフィス（オーガニゼーション）を作らなければならないということもまさに現代的な局面ですが、それも同じような状況に由来します。

さらに研究で得られた知識を消費したり利用したりするのは、必ずしも同じ専門仲間だけではなくて、むしろ科学者共同体の外にある様々なセクター、軍事、医療、産業だといったような社会的なセクター、外部セクターの活動のためにそれが利用されるというのが一つの特徴になります。

プロトタイプとネオタイプの区分け方

このネオタイプとプロトタイプというのは、研究者の意識としては、ネオタイプの科学研究をしながら、なお自分としてはプロトタイプの研究をやっていると確信していられるような場面というのはいくらでもありうるわけです。ですから、この二つの性格付けがきれいに分かれていると言うつもりは毛頭ありません。ある一つの研究がネオタイプの研究としても見ることができるし、プロトタイプの研究としても見ることができる。とくにネオタイプの研究というのはプロジェクト型で

村上陽一郎
国際基督教大学教授・東京大学名誉教授
科学・技術史、科学・技術の哲学が専門。著書『文化としての科学／技術』『科学の現在を問う』などがある。

あって、多くの違った領域の共同体から選ばれてきた人達が集っています。そうすると当然のことながら、プロジェクト全体は特定の共同体からは外れますが、その一部を担当する研究者は、まさに自分の共同体のために、という意識の中で研究をやっているということも十分考えられるわけです。そこまでが言ってみれば私の現在の科学に対する認識の前提です。

専門家共同体の開放

現代はこうしてプロトタイプの科学研究と、ネオタイプの科学研究とが共在し、混在しているわけですが、このことが、必然的に科学者共同体の自己完結性を破壊し、それを外に向かって開く、という事態を生み出しつつある、というのが、その前提から導く私の観察であり結論です。これを言い換えれば、専門家の集団は、非専門家に開かれるべきであり、また開かれざるを得ない、ということになります。それがここでお話したい論点です。

第一には政策レベルで政治、あるいは行政の介入がある。科学が、共同体という外部社会から隔絶された空間のなかに、自らを閉じ込めておけなくなったことは、日本社会では、1995年に制定された科学技術基本法あるいは、それに基づいて中央政府が策定する「科学技術基本計画」を見ても明らかです。

第二には法律の問題があります。科学技術に関して法律はいろいろ重要な問題を含んでいます。例えば、有害物質の規制値をどのように定めるか、というような課題は、科学研究者だけの判断ではなく、法律家も含めた様々な社会的な立場の人々との協調の上で定められていくことにならざるを得ません。いわゆるレギュラトリー・サイエンスというような分野が注目され始めているのも、ゆえあってのことです。こうした場合、科学の研究者は、自分の「仲間」だけを相手にしているだけでは済まなくなっています。

しかし、今日私が本当に話したかったことは、さらにその先にあります。それは政治や行政、あるいは企業というような社会的セクターは、特にネオタイプの科学研究において研究課題や使命を設定する立場にあるのですから、むしろ最初から科学の専門家とは緩い形で結びついています。そこでの科学の専門家と非専門家との繋がりのチャネルは、放っておいても強く、太くなりこそすれ、手を打たなければならないというわけではないかもしれません。むしろ、その繋がりの性格こそ、逆に問題でさえありましょう。

私が本当に問題にしたいのは、専門家である科学者と、非専門家としての一般の人々（あまり好ましい言葉遣いではないかもしれませんが、便宜上「市民」という言葉で表現しておきます）との間の繋がりのことです。

非専門家の提案

アメリカの西海岸にACTUPというHIV感染症患者の支援団体があります。もちろんいわゆる市民団体で、専門家は一人もいませんでした。結成当初はかなり過激な反近代医学、反科学的な糾弾運動で知られていました。当然専門家からはひどく嫌われ、恐れられてもいました。AAZTという物質がHIV感染症に有効かもしれない、ということになって、その治験が始まりました。そのときからこの団体は性格が変わり始めました。彼らは重要な事実に気が付いたのです。

治験は、「科学的正確さ」を期するために、二重盲検法が採用されてきました。有効性のテストで、同じような症状を持つ患者を二つのグループに分け、一方には治験中の物質を投与するが、もう一方のグループには「偽薬」を投与する。投与する側も、どの患者が何を投与されているか知らない状態にしておく。これが「二重」と言われる所以です。こうして、効くか効かないか、という判断に、心理的な要素が完全に排除できると考えられたからです。しかし、この方法にはもう一つ重要な条件が加算されています。それはすべての患者を標準化するために、治験中は他の一切の治療法を施さない、という条件です。この条件下に初めて治験中の物質が、症状の改善に役立ったかどうかが、判るはずだ、と考えられてきました。この方法は、そのときまで、「科学的正確さ」を保証するために、極く当然であると見なされてきたのです。とくに専門家にとっては、この方法を疑うことはナンセンスでありました。

しかしACTUPのグループは、患者の立場に立ったときに、この方法の恐るべき問題点に気付いたのです。この方法をとる限り、「偽薬」を与えられている患者は、治験期間中一切「治療」をされていないことになるではありませんか。これも考えて見れば当り前のことです。しかし、明日の生命を心配する患者やその家族、支援者であるからこそ、気付き得た問題点でもあったのです。爾来彼らは、懸命になって学びました。そしてとうとうFDA（全米食品・医薬品管理局）を動かして、問題の少ない治験方法の代替案を採用、普及させることに成功したのです。

専門家と非専門家の協力が望ましい

ここではもはや、専門家と非専門家とが敵対するのではなくて、共通のより良い社会的状況を作り出すことを目指して協力し合う、そういうプラットホームが生まれてきたと言えます。まさにACTUPは、最初特に専門家からは嫌われていたのが、今や彼らの重要なパートナーになっているのです。全米の医者から毎日HIV感染症に関して電話がかかってきます。そのメンバーは、オペラ歌手だったり、高校の先生だったり文学者だったりする。全く医者とも生物学研究とも関係の無い人たちです。その人たちが、一度もHIV患者を診たことのないような多くの臨床医より、単に治療の面だけでなく、患者の心理、患者の家族の心理だとかといったようなことも含めて、色々な点で助言を与えられるような立場になっているのです。実際にそう働いています。

何故それができたのか。それは科学の非専門家が、科学的、専門家的な結論を盲信しなかったからです。立場を変えたときに見えてくる問題を、正当に見て取り、そして専門家の立場を正当に批判することができたからです。専門家と非専門家とがお互いに異なる立場から協力し合う。そういう専門家と非専門家の関係を作り上げることが、私の科学論の目指すことでもあり、あるいは科学論というものに対して私自身がかけている期待でもあるのです。

平成13年度 教育プログラム白書

平成13年度は**表1**の通り、大学共同セミナー3回、大学教員懇談会1回、大学教員研修プログラム2回、大学職員研修プログラム1回、国際学生セミナー1回、「世界とアメリカ」セミナー1回、フィールドワーク体験セミナー2回、高校生のための「大学」セミナー1回と計12回を実施した。

各教育プログラムの参加状況（**表2**）は、主に学生を対象とするプログラム（大学共同セミナー・国際学生セミナー・「世界とアメリカ」セミナー）と社会人及び学生を対象とするプログラム（フィールドワーク体験セミナー）計7回では参加総数460名（昨年457名）とほぼ昨年並みで、一回当たりの参加者は65.7名（昨年65.2名）であった。

教職員を対象とするセミナーは、大学教員懇談会、大学教員研修プログラム、大学職員研修プログラムを合わせて計4回開催し、合計335名（昨年388名）の参加者が国公私立の各大学より集まり、互いに問題点を出し合い意見交換を重ね、各大学での懸案事項の解決に役立てた。教職員の参加者の傾向としては協力会員校に対し、非会員校と地方大学からの参加者の占める割合が相対的に増加しているのが目立った。

高校生のための「大学」セミナーは昨年度の宿泊大学説明会を装い新たに充実させたもので日帰りを含め全国より200名を越える参加者が集まり、盛会であった。

フィールドワークは昨年度に引き続き「シェイクスピアの旅」を実施し好評であった。参加者はロンドン等で現代風にアレンジされたシェイクスピアの新劇を堪能した。

また新たに八王子市文化振興財団との共催で、「絵画鑑賞と南仏プロヴァンスへの旅」を実施し、セザンヌの故郷での絵画制作に取り組んだ。

4月14日には、八王子市文化会館にて絵画展示会を開催しセミナー参加者が出展された。当日は八王子市長はじめ120名の観覧者があり成功裡に終わった。

最後に各セミナーで講師を務められた諸先生方、プログラムの企画・運営にあたられた各委員会の委員、そしてセミナーに参加された方々に感謝の意を表します。

表1　平成13年度 教育プログラム開催状況

■大学共同セミナー

回　数	期　間	主　題	講　師	参加人数
第185回	2001年 6月23～24日 (1泊2日)	マスメディアの現場から ―これでもキミはマスコミに来るのか?!―	長薗安浩，関口和夫、中野 潔、川人　博、内田　勝、萱島治子、椿阪妙子、篠田節子、	98名 (29校)
第186回	10月27～28日 (1泊2日)	国際社会学の可能性 ―越境する文化、社会、人をどう捉えるか：新たなシティズンシップのあり方を考えつつ―	アンジェロ・イシ、小井土彰宏、稲葉奈々子、宮島　喬、佐久間孝正	45名 (19校)
第187回	2002年 1月19～20日 (1泊2日)	科学論は科学の敵なのか？ ―科学をめぐる言説のゆくえを見据える―	村上陽一郎、長谷川眞理子、三中信宏、伊藤正直	29名 (14校)

■ 大学教員懇談会

第38回	2001年 7月7～8日 (1泊2日)	大学の新世紀	寺島実郎、有本　章、馬場錬成、風間晴子、吉田　文	77名 (54校)

■「世界とアメリカ」セミナー

第２回	2001年 6月15～17日 (2泊3日)	アメリカの21世紀像 ―ブッシュ政権の政策を多角的に分析する―	趙　全勝、石井　修、滝田賢治、宇佐美　滋、高松基之、山田　敦、永田雅啓、佐々木卓也、鈴木祐二、関場誓子、渡辺啓貴	122名 (17校)

■ 国際学生セミナー

第28回	2001年 11月16～18日 (2泊3日)	グローバルイシューと日本	有馬龍夫、松下和夫、今井圭子、勝俣　誠、納屋政嗣、山本吉宣、滝田賢治、関場誓子、奥田和彦、星野　智、ワフラ・オクム	70名 (15校)

■ 大学教員研修プログラム

第22回	2001年 9月22～23日 (1泊2日)	授業を分析し、創造する	石村雅雄、鶴野省三、向後千春、古藤　晃 サンドウ―・アダルシュ	79名 (54校)
第23回	2002年 1月26～27日 (1泊2日)	学生を活かすカリキュラム	山内正平、鈴木　貢、服部陽一、藤岡完治、大江淳良	56名 (45校)

■ 大学職員研修プログラム

第４回	2001年 7月23～25日 (2泊3日)	存在意義のある大学へ ―問われる職員の自己改革―	阿部謹也、諸星　裕、高橋輝義、西田誠一、河上一雄、鹿沼昭彦、堀坂浩太郎	123名 (73校)

■高校生のための「大学」セミナー

第１回	2001年 12月22～23日 (1泊2日)	“大学で学ぶ”とは	石　弘光、絹川正吉、大嶋建一、白川友紀、冨原眞弓、園田茂人、寺澤孝明、三澤健宏、本橋哲也、安岡　宏、市村禎二郎、大芝　亮、ケネス・R・エノック	202名 (59校)

■ フィールドワーク体験セミナー

第３回	2001年11月10日～ 2002年１月12日	絵画基礎セミナー（7回）	御田寺紀也	42名 (計53)
	2月19～25日 (5泊7日)	絵画鑑賞とスケッチの旅		11名
第４回	2001年12月４日～ 2002年１月22日	ライブトーク（4回）	本橋哲也	22名 (計43)
	3月19～25日 (5泊7日)	シェイクスピア劇の観劇ツアー		21名

表2　平成13年度教育プログラム参加状況

学校名	学生対象	教職員対象	合計
北海道		1	1
小樽商科		6	6
岩手		3	3
宮城教育		1	1
山形		5	5
筑波	11		11
宇都宮	1		1
群馬		1	1
埼玉	4	7	11
千葉	4	1	5
お茶の水女子	1	1	2
電気通信		3	3
東京	13		13
東京医科歯科	1	1	2
東京外国語	26		26
東京学芸	5		5
東京工業	1	2	3
東京商船		3	3
一橋	24	2	26
新潟		1	1
富山		4	4
金沢		4	4
福井		1	1
名古屋	2		2
大阪		2	2
島根		1	1
岡山		5	5
広島		5	5
愛媛		2	2
福岡教育		2	2
九州		3	3
九州工業		2	2
佐賀		1	1
鹿児島		4	4
北陸先端科学技術大学院		1	1
会員校国立　（11校）	90	20	110
一般国立　（24校）	3	55	58
国立小計　（35校）	93	75	168
東京都立	8		8
横浜市立	1		1
岐阜薬科		2	2
会員校公立　（1校）	8		8
一般公立　（3校）	1	2	3
公立小計　（3校）	9	2	11
千歳科学技術		4	4
北星学園		1	1
北海道工業		1	1
酪農学園		1	1
八戸工業		2	2
仙台白百合女子		1	1
いわき明星		2	2
足利工業		2	2
跡見学園女子		3	3
十文字学園女子		2	2
駿河台		2	2
聖学院		2	2
文教		2	2
明海		2	2
神田外語		1	1
聖徳		1	1
中央学院		2	2
東京歯科		3	3

学校名	学生対象	教職員対象	合計
東京情報		1	1
麗澤		1	1
青山学院	4	1	5
亜細亜		4	4
大妻女子		1	1
桜美林	4	5	9
学習院	7		7
北里		6	6
共立女子		2	2
共立薬科		1	1
慶應義塾	13	1	14
恵泉女学園	1	2	3
工学院		1	1
國學院		3	3
国際基督教	6	7	13
駒澤	1	2	3
芝浦工業		1	1
順天堂		1	1
上智	5	2	7
成城	1		1
聖心女子	20	3	23
清泉女子		1	1
専修	1	1	2
創価	1		1
大東文化		1	1
高千穂		2	2
玉川		1	1
中央	47	13	60
津田塾	3	2	5
帝京	1	1	2
東海		5	5
東海女子		1	1
東京工科		1	1
東京女子	5		5
東京電機		2	2
東京農業	1	3	4
東京薬科	1		1
東京理科	1	3	4
東邦		1	1
東洋		1	1
二松学舎		1	1
日本	9	11	20
日本女子		4	4
日本女子体育		1	1
武蔵	4	6	10
武蔵工業		3	3
法政	10	1	11
明治	15	2	17
明治学院	17		17
明治薬科		1	1
明星		1	1
立教	28	2	30
早稲田	14	1	15
神奈川工科		4	4
関東学院		2	2
相模女子		1	1
東洋英和女学院	13	1	14
フェリス女学院		3	3
敬和学園		4	4
国際	4		4
長岡造形		1	1
新潟経営		2	2

学校名	学生対象	教職員対象	合計
中京		1	1
中部学院		1	1
静岡産業		1	1
聖隷クリストファー看護		1	1
東海女子		1	1
愛知みずほ		2	2
中部		3	3
名古屋外国語		1	1
名古屋学院		2	2
日本福祉		1	1
名城		3	3
松阪		1	1
京都女子		1	1
京都造形芸術		1	1
京都文教		2	2
同志社		2	2
佛教		1	1
大阪工業		1	1
大阪歯科		1	1
追手門学院		2	2
関西		1	1
関西医科		1	1
摂南		1	1
桃山学院		1	1
神戸学院		2	2
神戸芸術工科		2	2
神戸親和女子		1	1
武庫川女子		1	1
天理	1	1	2
高野山		1	1
岡山理科		1	1
川崎医療福祉		1	1
くらしき作陽		1	1
ノートルダム清心女子		5	5
広島工業		3	3
広島国際		1	1
四国		1	1
九州産業		1	1
東和		1	1
西南女学院		1	1
福岡		9	9
福岡工業		1	1
福岡国際		1	1
九州ルーテル学院		1	1
熊本学園		2	2
日本文理		2	2
名桜		2	2
会員校私立　（36校）	231	89	320
一般私立　（91校）	7	156	163
私立小計　（127校）	238	245	483
大学校（1校）・防衛大学校		4	4
駒澤短期		2	2
白梅学園短期		1	1
東邦大学医療短期	1		1
大阪女学院短期	3		3
活水女子短期		2	2
準会員校　（1校）		1	1
一般短期・高専　（4校）	4	4	8
短大・高専小計（5校）	4	5	9
他高等教育機関（放送大学）	3		3
その他小計（出会人・高校生等）	315	4	319
合計	**662**	**335**	**997**

平成13年度 業務白書

●年間の宿泊利用者数二九、二〇七人

平成13年度の宿泊利用者数は延べ二九、二〇七（月平均二、四三四）人、グループ数は584（同49）グループであった（**表1**）。対前年比は三、三一五人減少で、これは平成13年11月から平成14年3月までユニット・ハウス3群から7群までを閉鎖したためである。なお平成14年4月からは内装工事のうえ例年通りの営業を行っている。

●利用者種別の利用状況

利用者種別延人数の構成比は**図1**に示す通りである。会員校の利用は一六、七九九人で、58％（前年度48％）であった。なお、当ハウス主催の各種プログラムをはじめ会員校の教師・学生が多数参加する集会が含まれているので、平成13年度は主催セミナーの利用人数を会員校に含めた。会員校と一般学生団体を加えると構成比は計82％となる。また、学会にも大学関係者が相当数含まれているので当ハウスの利用者の約90％は大学関係者ということになる。

大学関係の利用形態の主流は、いわゆるゼミ合宿、次にサークル等課外活動の合宿であり、宿泊数では1～2泊が圧倒的に多い。また、春から夏にかけて、例年、新入学生の合宿研修（オリエンテーション）が繰り広げられるが、クラス単位以上の合宿は計37グループ（20校）、延べ五、七三〇人を数えた。

なお、参考までに、本年度利用の多かった会員校ベスト10を**表2**で紹介する。グループ数・宿泊延人数とも中央大学が平成元年度以来13年連続で一位を維持したことになる。毎年上位2校は通信教育のスクーリングの利用者が大きな割合を占めていたが、今年度は早稲田大学の利用が目立った。

●年間の稼働率は30％

本年度の当ハウスの稼動日数は、年末年始の休館8泊と、6月の施設整備期間3泊分を差し引いた354日で、宿舎（収容定員310人。11月から2月までは159名）の年間平均稼働率は30％であった。**図2**に月別平均稼働率を示した。

表1　利用者別状況表

（　）内は前年度

利用者＼人数	グループ数	比率％	宿泊実人数	比率％	宿泊延人数	比率％	1団体平均人数
会員校	343（338）	58	11,094(9,988)	62	16,799(15,530)	58	32(30)
一般学生団体	100（136）	24	3,432(6,056)	19	6,969(11,655)	24	34(47)
学会	62（64）	8	1,777(1,890)	10	2,460(3,394)	8	29(30)
社会人団体	79（71）	10	1,479(1,239)	9	2,979(1,943)	10	19(17)
合　計	584 (609)	100	17,782(19,173)	100	29,207(32,522)	100	30(32)

図1　利用グループ構成比

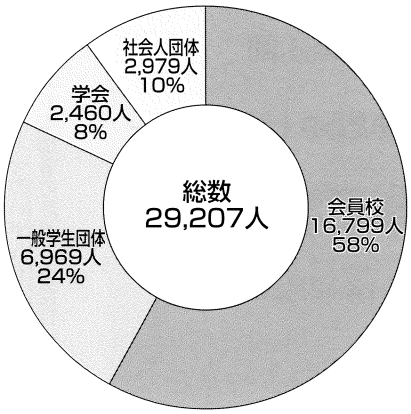
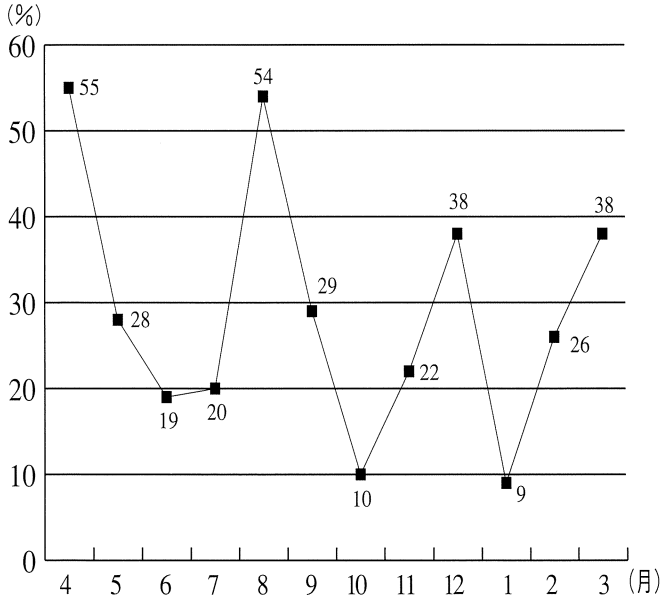


表2　協力会員校最多利用上位10校

大学名	グループ数	大学名	宿泊延人数
中央大学	39	中央大学	2,208
早稲田大学	31	早稲田大学	1,173
東京学芸大学	21	明星大学	1,161
立教大学	17	東京工科大学	859
東京都立大学	13	東京学芸大学	650
東京大学	13	白梅学園短期大学	537
一橋大学	12	東京都立短期大学	526
日本大学	12	東京薬科大学	524
法政大学	11	明治大学	522
国際基督教大学	10	国際基督教大学	518

図2　月別平均稼働率



第28回　国際学生セミナー

グローバルイシューと日本

2001年11月16～18日

［ゲスト講演］
グローバルイシューと日本
日本国政府代表・早稲田大学政治経済学部教授　有馬龍夫

［セクション演習］
中央大学法学部教授　星野　智
（財）地球環境戦略研究機関副所長代行　松下和夫
上智大学外国語学部教授　今井圭子
＊明治学院大学国際学部教授　勝俣　誠
一橋大学大学院法学研究科教授　納屋政嗣
＊東京大学大学院総合文化研究科教授　山本吉宣
＊中央大学法学部教授　滝田賢治
＊聖心女子大学文学部教授　＊関場誓子
＊国際大学大学院国際関係学教授　奥田和彦
国連大学教授　ワフラ・オクム
＊印は運営委員

［参加状況］15校70（男32・女38・内留学生13）名

◆

21世紀を迎え、グローバル化のうねりは益々加速の度を加えており、わが国も旧来の外交3原則すなわち「国連中心主義」、「自由主義諸国との協調」、「アジアの一員としての立場の堅持」が変容を余儀なくされて行く中で、日本が抱える課題を取り上げ、日本外交のあるべき姿を模索した。今回は、「環境とエネルギー」、「グローバルエコノミーの正と負の位相」、「グローバル軍事システム」、「人間の安全保障」、「紛争と人道的介入」という五つのテーマを取り上げ、各分科会では2名ずつ配置された講師を中心に活発な意見交換がなされた。本セミナー企画は9月米国同時多発テロ発生の半年以上前にスタートしたもので、テーマのいずれもが時宜にかなったものであり参加者の評判は大変良いものであった。

第1回

高校生のための「大学」セミナー

“大学で学ぶ”とは

2001年12月22～23日

［協力大学］
筑波大、東京外国語大、東京都立大、国際基督教大、聖心女子大、中央大、津田塾大、東京薬科大、明治大、防衛大学校

［全体講演］
一橋大学学長　石　弘光
国際基督教大学学長　絹川正吉

［模擬授業］
筑波大学物質工学系教授　大嶋建一
筑波大学機能工学系教授　白川友紀
国際基督教大学教養学部講師　Kenneth R Enochs
聖心女子大学文学部教授　冨原眞弓
中央大学文学部教授　園田茂人
東京薬科大学薬学部教授　寺澤孝明
津田塾大学国際関係学科助教授　三澤健宏
東京工業大学大学院理工学研究科教授　市村禎二郎
東京都立大学人文学部助教授　本橋哲也
一橋大学大学院法学研究科教授　大芝　亮
防衛大学校応用物理学科助教授　安岡　宏

［参加状況］59高校202（男91・女111）名

◆

大学をめざす高校生（特に1、2年生）及びその保護者、教員のために、大学で学ぶことの意味を考え、高校での学習のあり方を自立的に探究する機会を与えるための1泊2日のセミナーを開催した。

全体講演では石学長、絹川学長に「大学で学ぶとは」と題して大学で学ぶことの意義について講演していただいた。全体会では協力大学の教職員との、また大学生とのパネルディスカッションを実施した。さらに大学教員による文系、理系の大学模擬授業計10テーマが行われた。本セミナーは高校生の他保護者、高校教員を含めて200名を越える参加者があった。東京都および関東、甲信越在住者が大部分であったが、中には中部、近畿、中国、九州地方からの参加者も見られた。特に私立八王子高校からは大学受験生全員が引率の教員とともに宿泊参加された。

第186回大学共同セミナー

国際社会学の可能性

―越境する文化、社会、人、をどう捉えるか：新たなシティズンシップのあり方を考えつつ―

2001年10月27～28日

［ゲスト講演］
国境を越えるもう一つのシティズンシップの提唱
社会学者・ジャーナリスト　アンジェロ・イシ

［セクション演習］
一橋大学大学院社会学研究科助教授　小井土彰宏
茨城大学人文学部助教授　稲葉奈々子
立教大学社会学部教授　宮島　喬
東京女子大学文理学部教授　佐久間孝正

［参加状況］23校・45（男16・女29）名

◆

アメリカ南西部よりメキシコにかけて広がる巨大なラテン民族の世界、西欧社会をアラブやトルコの社会へと繋いでいる数百万人のイスラーム移民たち。日本にも今や200万人の外国人が生活し、海外にも80万人以上の日本人が暮らしている。本セミナーは国際化、トランスナショナル化する社会の現実に目を向け、これをどのようにとらえるかということをテーマに開催した。

セクション演習では小井土先生に北米と日本の経験を中心に「国境を越える労働者」と題して外国人労働者の問題を、稲葉先生にはパリでの事例をもとに移民から見た現代社会における『国境と人権』を、宮島先生には「〈多文化〉の意味を考える」と題して日本における外国人子弟の教育の現状を、また佐久間先生には「民族の再生（？）と国家の変容」と題してイギリスのウェールズ、スコットランドで起こっている民族運動を通して英国の分節化の動向につき話題提供があった。いずれの分科会でも日本にも近未来に現実に起こり得るテーマとして、学生の活発な討論がなされた。

第187回大学共同セミナー

科学論は科学の敵なのか？

―科学をめぐる言説のゆくえを見据える―

2002年1月19日～20日

［基調報告］
国際基督教大学教養学部教授　村上陽一郎

［講演］
早稲田大学政治経済学部教授　長谷川眞理子
農業環境技術研究所主任研究官　三中信宏

［運営委員］
東京大学大学院経済学研究科教授　伊藤正直

［参加状況］14校29（男24・女5）名

◆

20世紀は科学の著しく進歩した時代であったが、科学技術の成果が果たして人類にとって全て良いのか。科学者の社会的責任は何か。市民と科学との健全な関係はどういうものか。斯界の科学論者を代表する立場の異なる3人の先生

方を交えて討論した。村上先生は基調報告で科学の専門領域に携わる人はその領域では妥当性を持つが今日の複雑な社会の中ではそれだけでは充分でなく、非専門家の協力（アクトアップ）が欠かせないことを実例を通して示し、科学論の社会的役割を述べられた。長谷川先生は一般社会の第三者が科学に対し常に批判的な目を向けることの大切さを強調され、科学に迎合的な科学論者を戒められた。三中先生は科学論者の言説も科学により証明のされえないものは、科学者から極めて懐疑的であるとの見解を主張された。参加者はやや少なめであったが、分科会では活発な討論が行われた。すなわち村上先生の科学論の社会的役割に対し長谷川先生の否定的見解、三中先生の挑発的見解等が討論の活性化を促し興味をそそった。また司会を担当された伊藤先生もコーディネーターとして講師の論理の主旨を参加学生に判りやすく纏められた。

――ようこそ広場前にて――
前列右より　伊藤・三中・長谷川の各氏
村上・中嶋（理事長）、絹川（館長）の各氏

第23回大学教員研修プログラム
学生を活かすカリキュラム
2002年1月26～27日

［提題］
千葉大学園芸学部教授　山内正平
北海道文教短期大学助教授　鈴木　貢
金沢工業大学工学部教授　服部陽一
京都大学高等教育教授システム開発センター教授　藤岡完治
（株）メディアファクトリー常勤監査役　大江淳良

［参加者状況］44校・56（男48・女8）名

◆

カリキュラムは大学の教育理念、目標を具現化したものであり、広く社会に対してその内容と質を保証し得るものであり、常に検証し確かなものにして行かねばならない。同時に学生を活かすカリキュラムは如何にあるべきかについて「高度専門職業人養成とはいうけれど―学生に対する教育責任をどう果すのか―」「学生を活かす教育体制の構築」「自ら学び行動する学生を育む金沢工業大学の夢考房と工学設計教育の試み」「大学の授業はどのように行われ、学生は何を学んでいるか―大学の授業の参加観察を通して―」「『学生のキャリア開発』支援のカリキュラム開発」の各提題を設け各専門家に講演いただいた。このFDプログラムも初回より十数年を経て、その評価も高まり、参加教員数は協力会員校からよりも、非会員校、地方大学の参加者が目立った。参加者のアンケート結果によるとセミナー内容については7割以上の先生方が良かったと回答し、早速自大学に持ち帰り、授業に応用したいと述べている。

第3回フィールドワーク体験セミナー
絵画鑑賞とスケッチの旅
絵画基礎セミナー
2001年11月～2002年1月
南仏プロヴァンス絵画鑑賞と旅行
2001年2月19～25日

八王子市文化振興財団との共催で絵画基礎セミナーおよび南仏プロヴァンスにて絵画鑑賞とスケッチの旅を企画した。

［指導講師・旅行引率］
画家　御田寺紀也

［参加状況］53（内学生7）名

◆

絵画基礎セミナーは講義2日、実技4日、都心の美術館絵画鑑賞1日の日程配分で実施された。参加者は約8割が女性で主婦が多数を占めた。講義ではフランスの印象派モネ、マネ、ドガ、ルノワール、セザンヌ等の代表作につき作品の特徴、描かれた背景等鑑賞のポイントの説明を受け、参加者の多数が改めて過去の学習の記憶を新たにした。また実技会場の当ハウスのキャンパスは豊富な描写対象に恵まれ、スケッチでは一人一人に先生の適切な指導を戴いた。プロヴァンスへの旅は基礎セミナー参加者の内11名が参加し当地に4日間滞在した。セザンヌの足跡を尋ねたり、セザンヌが好んで描いたサント・ヴィクトワール山を参加者も心ゆくまでゆったりと作画に取り組んだ。また4月14日に八王子市芸術文化会館にて、本セミナー参加者氏の作品展示会が開催された。御田寺氏始め36名の方が計69点の作品を出品された。展示会当日は黒須八王子市長はじめ120名強の方が観覧された。

第4回フィールドワーク体験セミナー
ライブトークと観劇ツアー シェイクスピアへの旅!!
日帰りライブトーク
2001年12月～2002年1月
シェイクスピア劇の観劇ツアー
2001年3月19～25日

［講師・旅行引率］
東京都立大学人文学部助教授　本橋哲也

［参加状況］43（内学生11）名

◆

好評だった昨年に引き続き本橋先生によるシェイクスピア演劇についての青山でのライブトークとイギリス観劇ツアーが実施された。本セミナーの参加者は幅広い年齢層で構成されている点が、絵画セミナー参加者と異なる。今回の対象作品は「夏の夜の夢」、「リチャードⅢ世」、「リア王」、「ハムレット」、「ジュリアス・シーザー」の5点で、ライブトークでは英国版のビデオを使用し先生の熱のこもった独特の解説で、参加者は観劇の新しい見方を知った。英国旅行は21名が参加し、事前の合宿を当ハウスで実施した。

イギリスでの観劇は主にロンドンの劇場で行われたが、シェイクスピアの故郷ストラットフォード・アポン・エイボンにも足を伸ばし、本場のロイヤルシェイクスピア劇場では「夏の夜の夢」を観賞した。内容については参加者によるフィールドワーク体験記を次頁に掲載した。

フィールドワーク体験記

第3回フィールドワーク体験セミナー
南仏プロヴァンス絵画の旅

南仏プロヴァンス絵画の旅の思い出

八王子市南大沢　星田三恵子

2001年9月1日号（財）八王子市文化振興財団のトップチラシが私の目にパッと飛び込んできた。八王子発南仏プロヴァンス行き『絵画鑑賞とスケッチの旅』がそれである。何と兼ねてより切望し続けていた素晴らしい企画！どこが企画したのかしら？　私の地元に佇まう一度立ち寄って見たいと思っていた大学セミナー・ハウス!!　早速心躍らせて申し込んだ。憧れの地中海に近い南仏でゴッホ・ピカソに影響を与えた印象派の父・セザンヌが生涯愛したエクス・アン・プロヴァンス！中でもサント・ヴィクトワール山に初対面した時の感動は忘れられない。ミストラルというこの地特有の北風の吹き荒れる2月、ヴィクトワール山を目の前にして絵画は50の手習いで初心者にもかかわらず“圧巻”夢中で一枚書き上げた。嬉しかった！　生涯私の脳裏から消え去る事はないでしょう。旅の最後の午前中、小高い丘のてっぺんに登って遠方にそびえる雄姿・ヴィクトワール山を望める大眺望の田園風景の中に佇まう家々!!　何と夢ではなく現実にここで生活している若い家族達がいる!!その家々の窓から生活の音が聞こえてくる。朝クリーナーを回してお部屋を掃除している音、背後の家からは女学生がオペラの練習をしている声・・・素晴らしい環境と澄み渡る空気と新鮮な風が私の頬をなでながら、大満足の思いに浸りながら、この一幅の絵そのものの情景の中で1枚の画用紙に心地よい思いを描いている私がいる。こんな贅沢な至福の時を味わう事が出来て、絵画指導された御田寺先生はじめ関係者の方々に心より感謝で一杯です。尚ここ大学セミナー・ハウスは私の地元に位置し、森林の中で静かに学べる最高の環境!!　八王子市民は勿論のこと全国民に開かれた大学セミナー・ハウスとして特定の人だけでなく誰にでも開放し学びたい人が自分に合った形で学べる大学セミナー・ハウスになって更なる繁栄と発展を期待します。

エクスプロバンスのセザンヌのアトリエ入口前にて

第4回フィールドワーク体験セミナー
シェイクスピアへの旅

旅するシェイクスピア

東京都立大学人文学部助教授　本橋哲也

今春3月19日から3月25日まで、大学セミナー・ハウスの企画で「フィールドワーク体験セミナー＜青山発ロンドン行きシェイクスピアへの旅＞連続ライブトークと観劇ツアー」をしめくくる旅に講師・引率者として参加させていただきました。この企画は、大学セミナー・ハウスによる「フィールドワーク体験セミナー」の第四回目として企画されたもので、第1回が2000年8月のハワイ・オアフ島（講師・引率は山中速人さん）、第2回が2001年3月のイギリス・シェイクスピア観劇ツアー、第3回が2001年3月の南フランス・絵画ツアー（講師・引率は御田寺紀也さん）で、第2回のシェイクスピア・ツアーが参加者34名と多く好評だったため、リピート企画となったものです。

「本場のシェイクスピア」と聞くとなにか敷居が高いように感じられる方もおられるかも知れませんが、もともとシェイクスピア演劇は近代への過渡期にあった民衆の猥雑な活力を基盤にして成立した、とても泥臭い大衆／体臭演劇です。そこに登場しない人物や主題はあり得ないと思えるほど広範で雑多な人間ドラマが展開されるシェイクスピア劇を「本場」という名に恥じない素晴らしい舞台の息吹を通じて伝えたい、といつも思っている私にとって、事前学習の「ライブトーク」の場として青山のナジックという好適地を取っていただき、学習の総仕上げとして大学セミナー・ハウスで合宿、そして企画課から引率アシスタントとして旅行に同行していただいたこの一連の催しは、とても楽しく実り多いものとなりました。

数回にわたる事前学習ではシェイクスピアの人生、時代、演劇の特徴、ストラットフォードやロンドンの劇場やイギリスの演劇事情などについて共に学び、そのあと観劇する演目についてヴィデオで主要部分を紹介しながら、「本橋テッド流」の「この劇はここに注目」という話を好き勝手にさせていただきました。それが参加者の皆さんのお役にたったかは定かではありませんが、企画課の方たちが膨大な時間をかけて観劇演目のヴィデオコピーを作ってくださり、それを皆さんに配っていただいたおかげで随分と「予習」のお役に立ったのではないでしょうか。また3月の旅行直前に行われた八王子での合宿では、21名の参加者が現地での行動を容易にするため四つの班を結成、懇親の時を過ごしていただきました。

さていよいよイギリス行きですが、かなりの方がリピーターのため、ヒースロー空港の移民検査所での緊張もなく、入口が別の小生のほうが置いてきぼりになる有様。しかし第一の難関は、休む間もなく着いた夜からバルビカン劇場で4時間を超える『ハムレット』。自分も含めて寝てしまうだろうなあという予測を裏切って、参加者の皆さんは必死に舞台を見つめておられる。主演のサミュエル・ウエストのみずみずしい演技のおかげもあって、第一夜を乗り切った一同は自信を深め、今後に期待が膨らみます。

二日目はロンドンからシェイクスピアの生地／観光地ストラットフォード・アポン・エイヴォンに移動、篠つく雨のなか近郊のウォリック城やケニルワース城を見学の後、ロイヤル・シェイクスピア劇場で『夏の夜の夢』を観劇。このシェイクスピア劇のなかでもっとも楽しまないことがむずかしい劇をやはり楽しむと、翌日はいよいよ今回のツアーのハイライト、10年ぶりに舞台に戻ってきたケネス・ブラナーの『リチャードⅢ世』を見にさらに北上、シェフィールドへ。そしてこの演

目はあらゆる点でやはり最高の出来、これを見ただけでもツアーの価値はあったのではないでしょうか、観客を「味方」につけるブラナーの魅力に酔いました。その夜ロンドンに帰還、翌日昼間は自由行動で夜にアルメイダ劇場で『リア王』、嵐で壁が壊れ舞台に雨が降りそそぐ激烈な演出。次の日はロンドンでの最終日、バルビカン劇場で午後にグレグ・ヒックスの内省的なブルータスが印象的な『ジュリアス・シーザー』を見てから、皆でショアディッチのバングラデシュ街にくりだし食べ切れないほどの料理を御馳走になりました。一週間の旅程も正味は五日、めいっぱい観劇してイギリス時間に体が完全に慣れる頃には日本に戻るという忙しい日程でしたが、おそらく多くの方が期待されたものを得られたのではないでしょうか。私自身も参加者の皆さんとの友情をなによりの糧として、時代と場所を超えて旅するシェイクスピアの面白さを満喫させていただきました。最後になりますが、この企画を推進していただいた大学セミナー・ハウスの職員の方々の熱意とご尽力に心より感謝申し上げます。

ブラナーの熱演に感動！

長谷川幹夫

（1）全体的感想

ライブトーク、合宿を含めた旅行プランはツアーの性格と個人の行動をも纏めており、大変立派な有意義な企画でした。13時間を要する往復フライトと、6日間で5本の芝居が見られたことを考えると、料金25万円は大変な格安と感じた。このため自由時間を取る事は中々難しかった。ロンドン滞在中は本橋先生の御好意でシェフィールドまでドライブできたこと、ブラナーの熱演を観劇できたことは感謝にたえません。

（2）芝居の感想

初日の「ハムレット」は時差の影響が残っていて注視できなかったがAlan Davisのポロニアス第一墓堀り以外の役者は声量もなく印象も薄かった。「リチャードⅢ世」、「リア王」は大変印象深かった。Anne役のClaire Priceのリチャードとのやりとりは好演と思えなかった。若干女性蔑視がひどすぎた感がある。

スペアタイヤをもった中老年男がパンツ1枚でストリップショーを演じているのが各芝居共通の現象であるように見えた。名優のみにくい裸のショーが流行かと錯覚した。

（3）将来の期待

次回もぜひ参加したい。（今回は様子がわからず勧めなかったが）各カルチャーセンターの級友たち（特に男性の）に参加を呼びかけたい。

実り多い旅ができた

小林純子

シェイクスピアが特に好きでもなく、演劇も数えるほどしか観た事の無い私が「シェイクスピアの旅!!」に参加したのは無謀だったのかなと思いつつ、大変実り多い旅をさせていただき感謝しています。以下感想を述べます。

（1）ライブトークについて

夜渋谷まで出かけるのは大変と渋々参加したのですが、本橋先生のパワーに圧倒されて、シェイクスピア作品の読み方について少し目が開かれた思いがします。ビデオや筋書きのプリント等を安く供給して下さりさすが営利を目的としない大学セミナー・ハウスですね。

（2）事前合宿について

参加者の顔合わせ、自己紹介を通して皆さんのシェイクスピア劇に対する造詣の深さ、海外経験の豊富さに驚き、自分自身の不勉強さに呆れました。

（3）ツアーについて

ロンドンのホテルと劇場が近く、歩いて行ける処が多かったのは助かりました。初日の観劇は時差の関係で眠ってしまい、観劇後の夜は眼がさえて眠れずこの日の疲れが後まで響きました。初日は完全休養またはせめてオプションにして下さると有難いです。

劇場が違うので舞台の形態も違い、役者の登場退場の仕方が異なり、各々面白かった。特徴は「ハムレット」のピストル、「夏の夜の夢」の白と黒の色彩、空間の使い方、露出度、「リア王」の雨と嵐とびっくり要素が多い中、「リチャードⅢ世」の正攻法に好感を持ちました。「ジュリアス・シーザー」もそうですが、ある程度その時代のコスチュームの方が私のような素人は安心できます。シェイクスピアの旅なので目的には適っているのですが、今回は重いものが多く、充実していたのですが、疲れました。もっとコメディ、或いはミュージカルがあると良かったです。

思い出だけで終わらせたくない旅

守田ちか子

昨年3月に演劇関係の仕事を退職した私はもう芝居関係の仕事とは関係の無い世界へ…と放送大学（後期）に入学を決めていました。ところが、昨年10月初旬に文京区にある大学の学習センターに手続きに行きその事務所の入口のところで、グレーのB4二つ折りのチラシに「シェイクスピア…」の文字を見つけたとき私の心は躍りました。その瞬間„行く！„と決めました。それからは「シェイクスピア」を深めるべく図書館通い。失業手当も切れて生活不安はあるけれど、やはり私は演劇が好き！3月19日、13時間の飛行の後、待望のヒースロー空港に到着。最初の宿泊先であるシスルシティバービカンホテルに荷物を置いた後、バービカン劇場へ（チェックイン手続き大変でした）。「ハムレット」公演は原作を読み、舞台も何本か見ていたのでストーリー的には判っていたけどピストルを使う場面は？と思った。

2日目、ストラットフォードへ。ウォーリック城に到達した時には予定通り？の雨。上がったり降りたりとお城の中を巡ったけれど、もう少し時間があったら…というのが本音。その後ロイヤルシェイクスピア劇場で「夏の夜の夢」観劇。ユニークな舞台装置は見ているだけで楽しい。

3日目は本橋先生の案内で、ホーリー・トリニティー教会、シェークスピアの生家へ。その後クルーシブル劇場で「リチャードⅢ世」観劇。この観劇は私の最大の関心事であり、ケネス・ブラナーは思っていた以上に素晴らしい俳優でした。普段の稽古、肉体訓練は凄まじいものでは、と思いました。

4日目はロンドン市内見物の後、アルメイダ劇場で「リア王」観劇。リアルな舞台にセミプロの私は興奮しました。舞台が進行していく中での屋台崩し、雨、いいですねえ！これはもう役者以前の問題です。舞台が終わってロビーを出るとツアー仲間があの雨はなに？芝居の表現も色々、見方も色々ということを痛感した1日でした。

5日目、小宮さん姉妹とハイドパーク散策後、午後からバービカン劇場で「ジュリアス・シーザー」観劇。昨年のセミナーやビデオでの勉強でこの作品に対しての思い入れも強くなっていた私は結構緊張しながら舞台を凝視。休憩なしの2時間半はあっという間に終わってしまいました。生々しい役者の行動と奇想天外な舞台はとても興味深いものでした。

今回の旅を思い出だけで終わらせたくない。自分のこれからの肥やしにして行きたいと思っています。「シェイクスピアの旅!!」本当に有難うございました。

第101回理事会
平成13年12月21日／アイビーホール青学会館

【出席者】中嶋嶺雄（理事長）、絹川正吉（館長）、宇野重昭、佐野博敏、荻上紘一、佐藤保、石弘光、本江哲郎、（陪席）三宅彰
【委任状による出席】理事12名
○募金活動について
現在53名の方から三、五〇五、〇〇〇円のご寄付をいただいているとの報告があった。
○利用料金改定について
料金表改定の基本的な枠組みが議論され、次回の理事会・評議員会に諮ったうえで新年度から実施することになった。
○役員人事について
本江理事の専務理事退任が承認され、絹川館長が後任の専務理事として選任された。
○道路問題について
①道路建設費用の受益者負担、②取り決め等は文書に残すこと、③営業に支障をきたさない対策が必要であることなどの意見があった。審議の結果、これらの意見を参考に、中嶋理事長が地域住民及び八王子市との交渉にあたることとなった。

第102回理事会・第81回評議員会
平成14年3月28日／アイビーホール青学会館

【出席者】（理事）中嶋嶺雄、宇野重昭、荻上紘一、佐藤保、天城勲、（評議員）三宅彰、川原栄峰、井早康正、伊藤正直、宇佐美滋、井下理、後藤祥子、柳井道夫、山縣喜代、西原正
【委任状による出席】理事15名、評議員41名
各議案について逐次提案説明があり、それぞれ審議の結果、いずれも原案どおり承認された。主な報告・協議は次のとおり。
○募金活動について
平成14年3月24日現在で一〇、一七七、〇〇〇円（206件）の募金額となったとの報告があった。
○国立大学の臨時会費について
国立大学の会費を一律10万円臨時に増額をお願いできることになった。
○文部科学省への回答について
今後の運営改善の方針及び計画について回答した。
○平成13年度末一時金の支給について
12月の冬期賞与は業績不振につき1ヵ月分だけ支給し、経営状況を見たうえで支給することとしていたが、検討の結果、職員・嘱託0.3ヵ月、パートタイマー0.1ヵ月を3月末日支給した。
○役員人事について
絹川理事が館長・専務理事を退任。館長は後任が決まるまで中嶋理事長が兼務、専務理事は当面、専務理事事務取扱として本江理事（前専務理事）が就任。
○評議員人事について
学長交代に伴う東京理科大学学長西川哲治、学習院大学学長小倉芳彦、高千穂大学学長高野邦彦の各氏の退任、東京外国語大学学長池端雪浦、東京理科大学学長岡村弘之、学習院大学学長永田良昭、高千穂大学学長藤井耐の各氏の就任が承認された。
○平成14年度事業計画（案）並びに収支予算（案）について
平成14年度事業計画（案）並びに収支予算（案）は資料のとおり承認された。なお、主な事項は次のとおりである。
事業計画について――（1）平成14年度年間利用者延人数の目標は二六、〇〇〇人（平成13年度実績二九、五〇〇人）とする。（2）ユニット・ハウス（100棟200人）は老朽化に伴い一時全面閉鎖の方針を打ち出したが、内装等の補修を行い、使用することに方針を転換する。（3）施設設備の修繕費は最小限に留める。（4）教育プログラム事業は、セミナー・ハウスの重要な事業であり、21世紀の時代要請を踏まえた新機軸を打ち立てる。これまでの企画運営方式、事業予算等の見直しをはかり、新機軸に沿って各種委員会を再構築する。（5）各種委員会の定員削減等の経費の削減を行う。
収支予算について――（1）当期の収入予算一六八七六四千円（前年度二二一、四六九千円）に対して支出予算は一六一、九八〇千円（同二三六、一七六千円）とし、当期収支差額六、七八四千円（同▲一四、七〇七千円）とした。（2）収入予算が前年度予算額より減収（五二七〇五千円）となった要因は、ユニット・ハウスの全面閉鎖を打ち出したことによる影響などであり、年間利用延予定者数二六、〇〇〇人（前年度三二、〇〇〇人）とした積算による宿泊・施設収入減一三、五八三千円、食堂からの食事の売上手数料10％から5％に引き下げによる減収四、〇八九千円、施設改修協力金収入の廃止による六、一〇七千円、セミナー会費収入減による一五、六七五千円、内外学生センターからの国庫補助金廃止による一、二〇五千円などのためである。（3）支出予算は収入予算の減収に沿って大幅な見直しと削減を行った。特に人件費は二三、七三九千円、管理委託費は一四、六五五千円、固定資産取得費は一五、二五〇千円などの大幅な削減を行った。（4）昨年度と比較して、全体の予算規模を約30％縮小することで収支の均衡を図ったが、施設設備の老朽化、特に井戸が使用停止となった場合、収支はマイナスに転じる可能性もあるので、常に収支の状況を把握する。
○準協力会員校の加入について
町田経理専門学校の加入が承認された。
○賛助会員について
賛助会員規約が正式に制定され、健通技研株式会社の加入が承認された。
○利用料金改定について
平成14年4月1日より利用料金の改定が承認された。
○就業規則の一部変更について
就業規則の一部改正が承認された。
○道路整備について
市道路線廃止及び新道路敷との交換に伴う道路整備について、概要次のとおり承認された。（1）市道路線（赤道）廃止に伴う新道路は、倉郷住民及び八王子市と協議の上、6メートル幅で整備する。（2）その道路建設用地は、当ハウス（公共用地との交換面積を越えた部分）・都市基盤整備公団・伊藤房夫氏・大室孜氏の4者が市に寄付する形をとる。（3）4メートルで計画していた部分の道路建設に関わる測量・分筆等の費用は八王子市が負担する。（4）その部分の道路建設に伴う工事費用は倉郷住民が負担する。（5）詳細については八王子市及び倉郷住民と協定する。
○その他
寄付行為の改定案を常務理事会中心に検討しているとの報告があった。

平成13年度 第3回常務理事会
平成13年11月2日／アイビーホール青学会館

【出席者】（常務理事）佐野博敏、荻上紘一、佐藤保、（法人）中嶋嶺雄（理事長）、絹川正吉（館長・専務理事事務取扱）、（陪席）三宅彰
【主な議事】運営体制の変更、財務状況報告、募金活動報告、宿泊料金改定、食堂との契約更新、施設の補修改善、土地賃貸の承認、道路問題、平成14年度予算編成の基本方針、文部科学省指導への対応、事業の拡大方針、他。

第4回常務理事会
平成14年2月2日／アルカディア市ヶ谷私学会館

【出席者】（常務理事）宇野重昭、佐野博敏、小山宙丸、荻上紘一、佐藤保、（法人）中嶋嶺雄（理事長）、絹川正吉（館長・専務理事）、（陪席）三宅彰
【主な議事】募金活動報告、井戸改修工事報告、道路問題報告、会員校・準会員校の加入、大学との連携関係の促進、就業規則の変更、料金改定、ユニット・ハウスの今後の使用、平成14年度予算編成の基本方針、食堂との契約更新、他。

第5回常務理事会
平成14年3月28日／アイビーホール青学会館

【出席者】（常務理事）宇野重昭、佐野博敏、荻上紘一、佐藤保、（法人）中嶋嶺雄（理事長）、（陪席）三宅彰
【主な議事】運営改善の方針及び計画、第81回評議員会・第102回理事会の議題、健通技研株式会社の会員加入、寄付行為の改定（案）、事務局人事、他。

寄贈図書
平成13年10月～平成14年3月

『ヨーロッパ諸語の類型論』『英語格融合の研究』　学習院大学殿
『素顔の建築家たち――01・02』　都市建築編集研究所　石堂　威殿
『私の「唐詩選」絶句選集』　松岡八郎殿
『中央大学文学部の五十年』　中央大学文学部殿
『ミャンマー・現代女性短編集』　大同生命国際文化基金殿
『オンフルールの波止場にて』　中嶋嶺雄殿
『東京都立大学五十年史』　東京都立大学殿
『今を生きる・成瀬仁蔵――女子教育のパイオニア』
『日本女子大学学園事典――創立100年の軌跡』　日本女子大学殿
『環境とエネルギーの科学入門』『第10回英国科学実験講座』　市村禎二郎殿
『大学評価を読む』　大南正瑛殿
『身近かな文化をさぐる』　大谷芳孝殿
『私の兄バルラージ』　大同生命国際文化基金殿

ご利用状況

'01年10月～'02年3月
＊＊隔月2回利用。
＊＊隔月3回利用。
日帰りはグループ数のみ
（延べ人数には日帰りの利用者は含まず。）

■10月（36グループ、延九五〇人）
早稲田大学助教授　後藤春彦
明治大学・川口短期大学森久ゼミナール　高田橋範充
中央大学教授　林田博光
共立女子大学国際文化勉強会
東京大学石川・橋本研究室
お茶の水女子大学地理学コース
早稲田大学教授　渡辺仁史
学習院大学フランス会部　中山泰一
電気通信大学講師
中央大学国際関係研究会
東京理科大学建築ゼミナール　前田一男
立教大学教授　宮島　喬
立教大学教授　中井正則
東京電機大学助教授
第186回大学共同セミナー　岩崎光洋
学習院女子大学教授
原子衝突研究協会若手の会　西平直喜
創価大学教授　千葉　洋
杏林大学教授
東京クイズ倶楽部
郡内研究会
桑沢デザイン研究所
高橋聖書集会ヨシュア会
日本キリスト教団相愛教会
青葉台ナザレン教会
聖書キリスト教会
日本エネルギー学会
日本ヒンドゥークシュ・カラコルム会議
化学技術推進戦略機構
日立製作所
〈日帰り利用〉
日本使徒キリスト教会
スリーボンド
大学教員研修プログラム委員会
多摩炭やきの会
武蔵野会
〈個人利用〉
野猿峠脳神経外科　猪瀬　秀美

■11月（37グループ、延一、〇四九人）
東京都立大学教授　大塚和夫
東京外国語大学留学生支援の会
武蔵工業大学教授　佐藤三禄
桜美林大学教授　上坂　昇
早稲田大学コンツェルト
桜美林大学講師　清水安夫
中央大学教授　甲斐義行
立教大学教授　庄司洋子
第28回国際学生セミナー
中央大学教授　林田博光
中央大学教授　徳永英二
慶應義塾大学教授　徳岡直静
一橋大学講師　阿部修人
中央大学三上民事訴訟法ゼミナール
桜美林大学教授　永瀬順弘
アイセック一橋大学委員会
日本女子大学附属高等学校
地盤工学若手セミナー
日本建築家協会関東甲信越支部
アレクサンダー・アソシエイツ
ルソール合奏団
日本POP広告協会
東京ペンディングサービス
バイオモザイク研究所
住まい塾
日本分光
共栄ランチグループ
真木グループの会
ガイアジャパンコーポレーション
〈日帰り利用〉
第3回フィールドワーク絵画基礎セミナー＊＊
ソプラノリサイタルワインの会
多摩炭やきの会
帝京大学吹奏楽部
角川書店マリクレール編集部
〈個人利用〉
神戸大学　伊藤昭裕
筑波大学　藤田祐介
植村　順子

■12月（42グループ、延一、六二二人）
立教大学教授　上田　信
武蔵大学助教授　川島浩平
早稲田大学建築学科
法政大学教授　相田利雄
国際基督教大学カウンセリングセンター　福田　潤
早稲田大学教授　森　元孝
中央大学横山基礎演習　島田法子
桜美林大学助教授
日本女子大学教授　奥住秀之
東京学芸大学講師　栗林　世
中央大学教授
早稲田大学教授　内山明彦
早稲田大学教授　福井　学
東京都立大学助教授　今井昭夫
東京外国語大学助教授　平澤茂一
早稲田大学教授　岩井清治
桜美林大学（教授）　吉田倬郎
工学院大学教授
第1回高校生のための「大学」セミナー　有馬賢治
立教大学助教授
国際基督教大学和太鼓部　古田智久
日本大学助教授
明星大学通信教育部冬期スクーリング　有賀　弘
早稲田大学グリップス
日本大学教授
第22回社会学合同セミナー
ピースチャイルド東京
東京IT会計法律学園
郡内研究会
東京経済・静岡・高崎大学合同ゼミナール
日本分析化学会
種生物学シンポジウム
日本野鳥の会自然アカデミー
文学教育研究者集団
AITC
航空電子エンジニアリング
ジェームス事務所
近畿設備
〈日帰り利用〉
第3回フィールドワーク絵画基礎セミナー＊　伊藤昭裕
東京八王子ワイズメンズクラブ　藤田祐介
多摩丘陵の自然を守る会
岩上音楽教室
東京YMCA西東京センター

■1月（18グループ、延四〇四人）
一橋大学教授　鴇田忠彦
東京外国語大学講師　小崎　真
一橋大学教授　蓼沼宏一
第187回大学共同セミナー
第23回大学教員研修プログラム
東京都立大学教授　岩楯敏広
中央大学教授　亀山三郎
郡内研究会
実践女子短期大学生活福祉学科
創価大学留学生
創価大学教授　長谷部秀孝
バット博士記念ホーム児童養護施設
積聚会
JFBネットワーク協同組合
近畿設備
〈日帰り利用〉
第3回フィールドワーク絵画基礎セミナー＊＊
慶應義塾大学教授　井下　理
〈個人利用〉
東京都立科学技術大学　金　政仁

■2月（47グループ、延二、二四三人）
中央大学教授　石川敏之
東京大学教授　今井康雄
東京外国語大学教授　田島信元
駒澤大学地理学研究会
駒澤大学教授　瀬戸岡紘
駒澤大学助教授＊　谷敷正光
明治大学教授　根本　孝
中央大学音楽研究会
明治大学教授　西野万里
青山学院大学教授　寺東寛治
法政大学教授　後藤一美
中央大学国際関係研究会
早稲田大学教授　根来龍之
中央大学教授　遠藤喜佳
千葉大学教授　武蔵武彦
東京経済大学教授　森反章夫
早稲田大学教授　大塚英明
東京大学YSOS
早稲田大学教授　堀口健治
東京都立大学教授　宮川　彰
中央大学辞達学会
東京学芸大学幼稚園科
明治学院大学Ⅱ部体育会
東京学芸大学金谷ゼミ　高橋世織
早稲田大学教授　森田　明
東洋大学教授
聖学院大学ハンドベルクワイア
聖学院大学コミュニティ政策合同ゼミ
聖学院大学宗教センター
郡内研究会
東京IT会計法律学園
受験生
日本催眠療法学会
地球市民アカデミア
万国ローア・パブテスト福音伝道協会
ガイアジャパンコーポレーション
ジェームス事務所
近畿設備＊
メンネルコール交友会
エス・イー・テクノ
国土地理院
日本POP広告協会
マイケル・フレミング・ワークショップ
ウィル・ビー
〈日帰り利用〉
東海大学短期大学部助教授　広川美津雄
〈個人利用〉
大阪工業短期大学　重村　潤
中央大学教授　西海真樹

■3月（62グループ、延三、六六二人）
東京工科大学アドバンストクリエイターズ　北脇敏一
武蔵工業大学エコワークス
日本大学教授　吉野　孝
早稲田大学教授
早稲田大学政治課程研究会
第4回フィールドワーク絵画基礎セミナー　山川　仁
一橋大学観世会
東京都立大学助教授　山口和孝
埼玉大学教授　北岡伸一
東京大学教授
慶應義塾大学英語会　林　昇一
中央大学教授　三戸　浩
横浜国立大学教授　岩崎晋也
法政大学助教授
早稲田大学絵画会　狩野紀昭
東京理科大学教授　大沢幸生
筑波大学助教授　大澤吉博
東京大学教授
千葉大学教授　工藤秀明
千葉大学教授　野沢敏治
一橋大学教授　田中孝彦
東京学芸大学SCENT　田中　優
大妻女子大学講師
横浜国立大学講師　小川慎一
ICUグリークラブ
大妻女子大学教授　大野清志
慶應義塾大学教授　柳田利夫
国際基督教大学ICU祭実行委員会
武蔵工業大学助教授　新井秀一
東京学芸大学教授　金谷　憲
早稲田大学教授　村上公子
中央大学教授　本庄裕司
ICUディベーティングソサエティー　孫福　弘
慶應義塾大学教授
埼玉大学教授　伊藤　孝
東京大学川人ゼミ
一橋大学教授　伊豫谷登士翁
明星大学教授　光成豊明
日本大学教授　百地　章
青山学院大学教授　中澤進一
明治学院大学教授　水谷史男
国立病院東京災害医療センター附属昭和の森看護学校
和光大学教授　杉本紀子
大学キリスト者の会
都留文科大学教授　春日作太郎
獨協大学講師　永野隆行
現代と経済
京都薬科大学
ETIC
アジア科学教育経済発展機構
フッサール研究会
秀文館英語教科書研究会
哲学研究会
衣の会家庭科教育研究会
文学教育研究者集団
朝日カルチャーセンター横浜
富士電機FA会
ジェームス事務所
ザ・ワークス
ジャスコエンジニアリング
タイアップ
〈個人利用〉
一橋大学教授　坂内徳明

創立四十周年記念募金第二回報告

◇申込総額　一〇、七一七、〇〇〇円
（平成14年5月17日現在）

◆

千人会の会員、ご利用者、セミナーの講師はじめ多くの個人の方々からご寄付をいただき5月17日現在で一〇、七一七、〇〇〇円となりました。ニュースNo.162号掲載分以降の申込者御芳名を以下に記載させていただきます。今後は法人に対しても募金活動を展開して参りたいと存じます。引き続きご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

◇寄付申込者ご芳名（申込順）
（平成14年3月21日～5月17日）

二五、〇〇〇円　市川　節子殿
五、〇〇〇円　赤堀　洋子殿
五〇、〇〇〇円　吉田　幸弘殿
五、〇〇〇円　本江　哲郎殿
一〇、〇〇〇円　金子洋三郎殿
五〇、〇〇〇円　冨山　芳正殿
一〇、〇〇〇円　渡辺　忠胤殿
五、〇〇〇円　天城　勲殿
一〇〇、〇〇〇円　武田　昌輔殿
五〇、〇〇〇円　三宅　彰殿
五〇、〇〇〇円　中村　幸安殿
一〇、〇〇〇円　手塚千鶴子殿
五、〇〇〇円　長谷川幸男殿
一〇、〇〇〇円　二井　隆義殿
一〇、〇〇〇円　森　久殿
五五、〇〇〇円　才能教育研究会殿
二五、〇〇〇円　三宅　豊彦殿
五、〇〇〇円　荻野　一郎殿
一〇、〇〇〇円　山本　武彦殿
五〇、〇〇〇円　河田　喬夫殿
五、〇〇〇円　木畑　洋一殿
一〇、〇〇〇円　橋本　研一殿
一〇、〇〇〇円　青木　生子殿
五〇、〇〇〇円　小池　生夫殿
五〇、〇〇〇円　野崎　昭弘殿

創立40周年記念募金のお願い

財団法人大学セミナー・ハウス理事長　中嶋嶺雄

学生と教員が寝食を共にして学びあい、語り合う場こそ、これからの大学生活に最も必要ではないかとの理想を掲げ、緑豊かな八王子の広大な丘に開館した財団法人大学セミナー・ハウスは、お蔭様で2002年に財団創立40周年を迎えることとなりました。この間の皆様のご支援ご協力に厚く感謝申し上げます。

現在、わが国の高等教育機関がその設置形態の在り方も含めた抜本的な変革を迫られていることはご承知のとおりでありますが、当ハウスは財団創立当時から、国立・公立・私立の大学が設置形態の違いを乗り越えて協力していただけるというユニークな存在でありました。創立発起人たちの先見の明であったと思います。

そして21世紀の今日、セミナー・ハウスは大学を巡る諸状況や社会環境の変化とともに大きく変った当今の学生のライフ・スタイルやＩＴ革命の進展に合わせ、また生涯学習のニーズに応えて諸施設を整備し直さなければならない時期にさしかかりました。

このたび、文部科学省から募金に伴う免税措置の認可を得ることができましたので、広くハウスの事業にご理解ご賛同いただける皆様のご協力を期待して、ここに募金活動を展開しております。当ハウスの存続と発展にとって今回の募金活動は死活的な意味を持つものと存じますので、何卒応分のご助力を賜りますようくれぐれも宜しくお願い申し上げます。

●募金目標額：２億円
●募金の種類：個人１口5,000円、法人１口50,000円とし、１口以上
●募 金 期 間：2001年11月1日から2003年3月31日まで
●払 込 方 法：①銀行の場合
三井住友銀行北野支店（店番号268）
普通預金口座番号　0493285
②郵便局の場合
口座番号00150-1-74590
●払 込 先 ：①、②とも「財団法人大学セミナー・ハウス」
なお、ご寄付につきましては税金優遇措置が受けられます。

【募金に関するお問合せ先】　0426-76-8511（総務施設課）

●セミナー開催予告●

■第39回大学教員懇談会
「大競争時代における大学教員の生き方」

【期日】平成14年7月6・7日（土・日の1泊2日）

【趣旨】90年代以降の大学改革が進行する中で、大学教員には、従来の教育、研究の場における競争の激化に加えて、社会との関わりも要請されてきている。本来専念すべき教育や研究の分野について改めて考えてみると、我々は果たして学生に満足感を与えているのか。大競争時代において、女子大学など特徴をもつ大学はどのように存立基盤を確立すべきなのか、大競争という大波に呑まれることなくむしろ冷静に状況を見て、個々の教員が本来学生とともになすべきことを見極める必要がある。

【講演】
大学教師―その専門性と責務（duty）／桜美林大学教授・寺崎昌男

【提題】
▼女子大学における理系人材の育成―現状と展望／日本女子大学教授・小舘香椎子▼カリキュラム改革への試み――学生を満足させ、かつ教員の能力を最大限活かすための／大妻女子大学教授・斉藤恵子▼大競争時代の大学―大学を取り巻く競争的環境／桜美林大学学長補佐・大学教育研究所助教授・高橋真義

【定員】90名（先着順）【申込締切】6月26日【参加対象】大学の教・職員【参加経費】２０、０００円（宿泊・食事代、資料代を含む）

【問合せ先】大学セミナー・ハウス・企画広報課まで。
電話＝０４２６-７６-８５３２
ＦＡＸ＝０４２６-７６-０２６６

●館長室から●

本二〇〇二年は、当大学セミナー・ハウスが財団法人として創立されてから四〇周年になります。これまでご支援・ご協力をいただいた多くの皆様方に、心から御礼申し上げます。八王子の多摩丘陵の一角を占める当ハウスを訪れて下さる方々は、東京にもまだこんな自然が残っていることに驚き、心が洗われる思いだと褒めて下さいますが、多くの樹木や野の花々も、ここに残る自然環境とともに貴重な資産ですので、今後も大切にしてゆきたいと職員一同心掛けています。

資産といえば負債が一切無いかわりに、流動資産に乏しい当ハウスは、学生諸君のキャンパス・ライフやライフ・スタイルの変化、国立オリンピック記念青少年総合センターなど立派になった他の施設との競合、当ハウス施設の老朽化等々によって、利用率の漸減に悩んでおります。理事・評議員や当館職員のご協力により、平成13年度は久々に若干の繰越金を計上することが出来そうですが、新しい時代の大学セミナー・ハウス像を求めて、今後とも努力致しますので、引き続きご支援をお願い致します。

そのようなお願いの一環として現在、当大学セミナー・ハウスでは政府による免税措置を得たうえで、「四〇周年記念募金」を実施しております。このニューズ・レターの前号（第162号）より、これまで募金に応じて下さった方々へのお蔭様でご報告させて戴いておりますが、お蔭様でようやく一〇〇万円台になりました。しかしながら、まだまだ目標額には程遠く、大変恐縮ですが是非是非ご協力をお願い致します。

去る二月二日の常務理事会で絹川正吉館長が辞意を表明され、常務理事一同慰留をお願い致しましたが叶わず、理事長の私による館長兼任が三月二八日の理事会で決定されました。ここに絹川前館長のご苦労に感謝申し上げますとともに、皆様の変らぬご指導をよろしくお願い致します。

（中嶋嶺雄）

表紙の写真＝第3回フィールドワーク絵画セミナーにて、御田寺氏のご指導を受ける参加者の皆さん。

セミナー・ハウス
2001年10月～2002年3月分
第163号
定価：200円

発行=財団法人　大学セミナー・ハウス
〒192-0372　東京都八王子市下柚木1987-1
TEL　0426-76-8511　FAX　0426-76-1220
振替口座　00150-1-74590

発行人=中嶋　嶺雄
編集=大学セミナー・ハウス企画広報課
制作=中山企画

SEMINAR　HOUSE
The Journal of Inter-University Seminar House No.163
(October,2001～March, 2002)